様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１　年　５　月　５日現在

研究種目：基盤研究　（C）
研究期間：２００７～２００８
課題番号：１９５２００１４
研究課題名（和文）　個体存在とモイラ運命の形而上学－アリストテレス研究－

研究課題名（英文）　Metaphysics of Individuals and Moira -Study of Aristotle-

研究代表者
山本　巍（YAMAMOTO　TAKASHI）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：７００１２５１５

研究成果の概要：人間は、自らが何ものであって、宇宙進化の先端に立つことの意味は何であるか、に関心をもつところの生き物である。こうして人間は、一方では原初受動性に制限され（誰も生まれようと思って生まれたわけではない）、世界の偶然性に翻弄される。他方では個人として自らの活動でその存在を維持拡張しようとする。その個人と個人を超える宇宙脈絡の力のせめぎ合いがモイラ運命であることを明らかにし、「汝自らを知れ」という抽象の極みとも見える掟が具現遂行される現場がモイラ運命であったことを示した。そしてこれに基づいて具体例としてオイディプスの悲劇を解明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,700,000	510,000	2,210,000
２００８年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：西洋哲学

１．研究開始当初の背景

時代は産業構造の劇的変化とグローバル化を迎え、激しく動いている。人類の運命は間違いなく新しい段階に入りつつある。しかしその人類の運命の帰趨は見通しも定かではない。そこで人間理解のモデルとして、宇宙の巨大さに直面し続けたギリシア人の哲学を取り上げることとした。その時、「選ばれた民族」の自覚形態を生きたユダヤ人に対して、「選ぶ個人」に力点を置いたギリシア人の思考を中心に置こうとしている。

２．研究の目的

「選ぶ個人」の強調はギリシア人の英雄崇拝にも現れているが、その英雄も運命の匙加減という点も否定しがたく、むしろ英雄こそ偶然の力に押し潰されもした。ギリシアに悲劇が誕生した所以である。そこで世界を「わたしの世界」にするオペレータとしてのこころ（独我論になるほど焦点化するこころ）に、こころを超えるモイラ運命が迫るとはどのようなことであるか、を探究する。そのために個体の成り立ちと世界の在り方に関してはアリストテレスを中心とする哲学から、個

人を取り囲む運命脈絡の関わりに関しては主にギリシア悲劇から考察することを目指した。

３．研究の方法

人間中心主義を完膚無きまでに批判したヘラクレイトス、自己保存を本質とする植物生命から、自己実現を目指す・言葉をもつ・共同体を生きる人間までをカバーするアリストテレス、偶然の威力に倒されながら屈しないオイディプスの悲劇、を中心に研究。

４．研究成果

大きく纏めれば、以下の論点になろう。

①二本足で立ち、言葉をもつことで人間は、己の前に地平を開き、全天を仰いで宇宙の巨大さの前に立つこととなった。そして言葉によって人間は、考えうる可能性をあらゆる方向に自由自在に展開が可能である（三千大千世界、これ我が世界）。それだけ人間は、個人それぞれが自分の選好に従って進んで、多様性故の分裂と混乱に巻き込まれることにもなる（意見は異見となって混乱し、異言が氾濫するすること、バベルの塔の寓意の通り）。

と同時に善と正義の感覚を頼りに、言葉によって人々の間に一致をもたらす判断と選択を共有しようとするところに「政治的動物」としての人間がいた。アリストテレスが人間を「政治的動物」と規定したのは、言葉をもつものの悲惨と栄光の姿であった。

②言葉の働きは、何よりも事の筋目（尺度）に沿って言分けることにある。正と不正、昼と夜、冬と夏、右と左などなど。言葉が人間の現実を近みの現実として言挙げ、「我らが事」として事成らしめるのである。言分けは事分けである。常夏の国の人には夏と言挙げる意味がなかった。冬と言分ける生活文脈がないからである。こうして言葉は脈筋に応じて言分けて事実を定着させる。そしてそれに応じて行動する。そこで「これにて一件落着」かに見える。

しかしヘラクレイトスが台所で「ここにもまた神々はいましたもう」と言ったように、そしてアリストテレスが示唆したように、真理の微光が世界に広く薄く拡散している。われわれの現実のどんな＜こと＞にも隠された脈筋がある。最小の＜こと＞であっても、最大の＜こと＞に触れている。つまり現実の＜こと＞は＜こと＞として自己完結しておらず、改めて語り直すこと（言分けの線を引き直すこと）を要求する謎であり、問いかけであり、対話への招きである。それは単純愚直に言えば、呼びかけへの応答を要求するところのモイラ運命なのである。偶然にぶちまけた「がらくたの山」に見えても、われわれに問いかけ迫る運命の脈筋を覆い隠した＜こと＞なのである。

③人間は独我論に毒されるほど「人は一人」という原初現実にいる。取り消しも代替も効かない自己を生きる以外にないからである。そうした原初現実を設えているのがこころである（個体化原理）。そこで人は自分のこころに抱く意見、願い、期待、計画、計算を一切に先立つ原理の如く思ってしまうのである。人は自ら原理たらんとする存在である（善悪の知識をまるで自分本来のものであるかの如く求めて、禁断の木の実を食べたことに現れている）。

しかし自分のこころの思いを先立てて世界を見る限り、何ものかに出会うことは難しい。出会いは未知未見の何かに向かって「出て会う」以外にないのに、自分のこころから始まってこころに終わる回帰性閉鎖回路しかないからである。そこでは自分が出会う資格のあるもの（それ即ち自分に出会う資格のあるもの）しかない。同様に自分がその能力と努力で何ごとかを成就することに成功したとして、それは自分の望み、主観的な目的を達成したことではあっても、何かに出会っていることにはならない。自分のこころに思い描きうる可能性の延長のものしかなかろうからである。そして運命との関係も消えることになる。運命はこころを超える脈絡に載ってこそ訪れるからである。現代社会で成功失敗、勝ち組負け組が声高に言われる自己実現も、自分の望みを先立てている限り、自分の主観的望みの達成でしかなく、喜びと安心ではあっても、人はこころの満足という陶酔の内に眠ることになる。

しかし偶然は自分が世界の中心でも人生の主人でもないことを突きつける現実そのものである。自己陶酔の夢世界を外から破ることになる。人間は誰一人として生まれようと思って生まれてきたわけではないし、存在しようと思って存在しているのでもない。人間は自ら原理（始め）たらんとして、その実は原初受動性に制約されている（I was born.）。つまり自己原因では全くなかった（無の無）。こうして自分の関心だけに浸りきりになることを止め、こころの望みで測ることを断念するとき、それは死に裏打ちされて、ということに他ならないが、そのとき世界はそれ自身として受け入れられる運命脈絡を浮き彫りにすることになる。

④１０年以上にわたる王としての政治に成功し、４人の子に恵まれたイオカステとの家庭生活を送ってきたオイディプスは、先王殺しの事件の真相究明と「自分は何ものであるか」の探究に急き立てられた。そのときオイディプスが覗き込んだのは、人がその人生劇場の舞台の上で達成実現することの重要性を薄れさせる謎が人生の中核にあり、そしてそれが人間に掌握できない偶然として、人間

に支配できない力として人間を外から叩き続けていることに対して不知不識の内に呼応し、測るべからざる無限の深淵を人間が跨いでいる現実である。そしてオイディプスの身魂を貫いたのは、人生劇場の表裏を通底する人間の誰にも等しい悲惨故の共苦同悲であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）
①山本　巍「人間の地平－その裏表－」（『国際社会科学』、査読無、５９号、２００９年、２３－３８頁）
②山本　巍「人間並みの知恵－ヘラクレイトスを超えて－」（『哲学・科学史論叢』、査読有、１１号、２００９年、１－４６頁、http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/23876）
③山本　巍「われわれに言語を語らせるものは何か－ヘラクレイトスの場合－」（『ギリシャ哲学セミナー論集』５号、２００８年、５３－７０頁、http://wwwsoc.nii.ac.jp/gps/Ronshu/2008_4.pdf）

〔学会発表〕（計　１　件）
①山本　巍「われわれに言語を語らせるものは何か－ヘラクレイトスの場合－」（ギリシャ哲学セミナー第１１回大会、２００７年９月９日、東京大学）

〔図書〕（計　１　件）
①山本　巍『ヨーロッパにおける政治思想史と精神史の交叉』（共著、慶應大学出版会、２００８年、１－２４頁）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

○取得状況（計　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　巍　（YAMAMOTO　TAKASHI）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：７００１２５１５

(2)研究分担者

(3)連携研究者